
人魔誤謬錄

鷹尾括

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魔誤謬録

【NZコード】

N4404S

【作者名】

鷹尾括

【あらすじ】

人類と悪魔との戦争が終わりを迎えてから、半世紀が経過していた。人類に降つた悪魔は、わずかながら人間世界への居住を許され、ひつそりと暮らしていた。しかし彼らは、敗北を認めたわけではなかった。種族としての性質、「契約」の力による、静かな侵攻を開始していたのだ。

「駄目です。これ以上は一日たりともまかりません」「田の前の男は冷徹に言い放つた。

「そこを何とか。もう数日待つてもらえれば、必ずお支払いしますから」

「期日まで相当な余裕を設けたことを忘れましたか。一こちらはすでに譲歩しています。それでも無理だと言つなら、何故契約を結んだのです？」

商人は頭を抱えた。金額に田が眩んだ結果だつた。大量発注とはいえ、相場の一割引きに近かつたのだ。すべて売りさばければ相当な儲けになる。すぐにでもサインをしたかつたが、相手の素性を考へて一步だけ踏みとどまつた。交渉を重ね、間違いなど起こらないという条件で契約を結んだ翌日、取引先の会社が倒産した。莫大な金が回収不能になり、支払いの田処が立たないまま、期日を迎えてしまつたのだ。

「お願いします。不幸な事故だつたんです。私の責任じゃ……」

「その倒産した会社の社長ですが」

運ばれてきたコーヒーに砂糖をじばじば入れながら男が言つ。

「悪魔との契約を反故にしたと、小耳に挟んでいます」

深々と下げていた頭を、がばりと上げる商人。溢れる寸前までミルクを追加した男は、ゆっくりとカップを持ち上げ、頭を運んで口をつけた。

「浮気が妻に発覚して大変な修羅場になつたそうで。すべてをなかつたことにしようど、関係者全員の記憶を弄らせたのことです。悪魔は、今後一切浮気をしないという条件で契約を交わしました。ところが、その三日後には新たな女と密会していたのですよ」

商人の手が震えた。記憶の操作ということは、悪魔に魔法の使用を依頼したということだ。内容そのものは下らないが、手段が高等

に過ぎる。その契約を破つた以上、大きな災いが降りかかるのは当然だろう。

叩きつけられた拳がテーブルを揺らす。手付かずのコーヒーがこぼれた。

「あの人は確かに女癖は悪かつたが、それにしたつてこんな……」「信頼の置けない相手と付き合つから、こういうことになるのです。あなたに責任がないわけではありません。このままだと」

言葉は悲鳴に遮られた。店の外を見ると、一匹の犬が初老の男の首に噛み付いていた。男の顔には見覚えがあった。近所に住む弁護士だ。どれだけ暴れようとも犬の牙は離れない。彼を組み伏せたところで、棒を持った連中が割つて入り、犬は打ち殺された。その頃、弁護士はぴくりとも動かなくなっていた。馴染みの女給仕が、悪魔との約束破つたらしいですよ、と耳打ちしてきた。

「あなたもああなるかもしませんね」

「嫌だ、私には妻も子もいるんです。死ぬのも店が潰れるのも困ります」

「そうは言つても、これは私どもの体質の問題ですので。どうにもなりません」

がつくりとうなだれる商人を前に、甘つたるい液体を飲み干す男。伝票を手に席を立つた時、店の時計が六回鳴つた。

「ほら、こんなことをしている暇があるのなら、金策に走つたらどうですか。今日という日はまだ四分の一残つてゐる。日付が変わる前に、142万7100カラソ、耳をそろえて用意してください。ここは私が払つておきますから」

会計を済ませ、男が店の扉をぐるりと踵を返し、ずかずかと商人の元へ歩み寄つた。自分が何を言つてしまつたのか気づいた商人は、青ざめた顔で言い訳を繰り返す。男がずいと顔を寄せた。

男はしばらく立ち止まつた後、ぐるりと踵を返し、ずかずかと商人の元へ歩み寄つた。自分が何を言つてしまつたのか気づいた商人は、青ざめた顔で言い訳を繰り返す。男がずいと顔を寄せた。

「ですから」

言つた男の顔が、商人と同様に青ざめ始めた。しかし、血の気が引いたのではない。全身の肌の色そのものが変化を遂げていた。顔に刺青のような模様が走り、髪は白銀に光り、頭からは山羊の角が、背中からは蝙蝠の翼が現れた。泡を吹いて倒れる商人。

「私は悪魔なのですよ」

人類と悪魔との戦争が終わりを迎えてから、半世紀が経過していた。異次元世界たる魔界から来たつた悪魔に、一時は地表の半分を明け渡すまでになつていた人類は、英雄レイオリアの出現により、各地で攻勢へと転じた。力強くでの人界制圧に否定的だつた魔界の宰相ナイキウスが、自らの軍団を連れて出奔するという、大番狂わせもあつた。ついにはレイオリアを魔界へと送り込み、悪魔の指導者ザツハキールを打ち倒し、人類は勝利を手にしたのだった。

その後、人類に降つた穩健派の悪魔は、レイオリアの後押しもあり、わずかな同胞を人界へと住ませた。将来の両世界の交流を目指す、という名目であつた。危惧する声も当然上がつたが、最終的には居住を受け入れることとなつた。人類最大の英雄の支持、そして何より劣勢を覆して戦いに勝利したという歴然たる事実が、人類の気を大きくさせていた。

悪魔など何するものぞ。栄光は人類にあり。

そう思い上がつた空気が流れるのも、致し方ないことだったのだろう。

真夜中を知らせる音が鳴つた。それが鳴り止み、静寂が五分続いても、商人は現れなかつた。

「駄目、か」

書類の作成を終え、ソルキウスはペンを置いた。

「少し厳しすぎはしませんか。不測の事態だったのは事実ですし、あの商人は悪人では」

「悪人とか善人とか、そんなことは関係ないのだよウルエロ。契約とはそういうものだ。それにあの社長は、浮気など問題にならないような悪事もいくつか働いていた。そんな男と懇意にしていたのは、やはり彼の落ち度だろう」

空になつたカップを渡す。小姓はまだ納得のいかない顔をしている。

「いいことを教えよう。彼は善人か悪人かと問われれば、間違いく悪人さ。何故って、取引しようとしていたのは麻薬の原料だよ？」

「え？」

ウルエロは瞠目した。危うくカップを落とすところであった。

「お茶の葉だと聞いていましたが」

「葉っぱには違いない。精製して摂取すれば天国に行ける魔法の葉っぱだ。そもそも、あんなちっぽけな個人商店の主を相手に、私を使って取引しようと言つんだ。物騒なものであることは、依頼が来た段階で読めていたよ」

裏切りが絶対に許されない契約だからこそ、ソルキウスを介したのだ。莫大な報酬を支払つてまで彼を雇つたのは、それに見合うだけの見返りがあるからであり、彼への信頼の証でもあつた。

悪魔との契約を破れば災厄が降りかかる。

戦争への突入より遙か昔、力を欲する人間が儀式によって悪魔を召喚していたような時代から、すでにその概念は存在していた。

悪魔は本質的に律儀であり、理によつて行動する。人間の側から代償を差し出せば、間違いなく契約どおりのものを与えてくれる。しかし、すべての契約行為がそう流れるわけではない。代償の支払いが後になる場合もあるだろう。そうなると、欲深い契約者の中には、何とかして代償を支払わずに済ませようとする者も現れる。あるいは、要求どおりのものを差し出さないのである。

こういつた連中は、尽くこの世の地獄を見た。降りかかる災厄は、悪魔による報復と考えられてきた。契約を結ぶ際に、そのような呪いがかかるのだとも。それがどちらも事実ではないと判明したのは、戦争が終わつた後のことだ。

半世紀前、人類は初めて知ることとなつた。

悪魔とは、そういう体質を持つ種族なのだということを。

「彼のことは気の毒だと思う。品物はすぐに売りさばいて大金を得

たが、それも掛け金の支払いに使つてしまつてね。當てにしてたのは、倒産した会社から回収する予定の金だけだつたのだよ。運が悪いとしかいゝようがない

「でもそうなると、依頼主様はお怒りになるのではありますか？」

「旦那様に依頼をした意味が……」

「何か勘違いしているようだね、ウルエロ」

ソルキウスは薄つすらと笑つた。

「私は金が回収できなくなつたとは一言も言つていないよ？」

「え……」

どういうことか、と聞くのを遮るかのように、ソルキウスは声を上げて背伸びをした。つられて欠伸が出そうになるのを、ウルエロは嘔み殺した。

「もう休みなさい。明日も早い、私も寝ることにするよ」

そう言つて主が寝巻きに着替え始めたので、ウルエロは従つしかなかつた。部屋を出て鍵をかけ、しばらくそのまま扉を見ていると、いくりもしないうちに規則正しい寝息が聞こえてきた。

話の続きは気になつたが、これ以上考えるのはやめにした。主の言つことに間違いなどあるはずがない。そして明日になれば、自然と答えが分かるのだろう。彼はそういう男なのだ。

主の目から逃れた小姓は、遠慮なく欠伸をし、廊下の奥へと消えていった。

翌日、近くの川に死体が浮かんだ。あの商人であった。

よく晴れた日になつた。朝から取引先を回り、予定していた仕事を午前中に終えた。行く先々で、商人の死についての話題を聞かされた。どれも適当に受け流し、三番目の訪問先で昼食に招かれた後、帰途に着いた。

川にかかる橋の近くを通りかかると、人だかりができていた。城の兵が川に潜つて何かを探している。それを見物に来ているのだ。橋の周辺は兵に固められていて、野次馬を鬱陶しそうに抑えている。商人の死体が上がつたのがここだつた。橋脚に引っかかっていたという。だがそれは首だけで、残りの部分は細切れになつてあちこちから発見された。未だにすべてがそろわづ、搜索はかなり下流の方まで及んでいるようだ。

そこかしこで商人の噂が囁かれている。彼が後ろ暗い商売をやつていることは、周辺住民にも薄々感づかれていたようだ。自業自得だ、と誰かが言つた。

橋を渡ろうとしたところで、悪魔二名の存在に人々は気づいた。一瞬会話が止まつたが、ソルキウスが会釈して通り過ぎると、また元のひそひそ話へと戻つていつた。

今回の件にソルキウスが関わつていたことは公になつていない。知つているのはあのカフェの連中くらいである。だが、商人の殺され方を見れば、悪魔絡みの事件ではないかと勘織られるに決まつている。

「あいつめ、派手にやつてくれたな」

「ゆつくりと橋の上を歩きながらソルキウスが言つ。

「あれは、やはり」

「契約違反の災厄じやない。あいつの仕業だ。金を用意する最後のあてとして教えておいた。どんな代償を背負わされるかはわからぬい、と付け加えて」

その結果があの有様、と。頭だけでも無事な形で残っていたのは、せめてもの情けということだろうか。諦めて契約違反の災厄を入れるので、果たしてどちらがましだったのか。確かめる術はない。緩やかな曲線の頂点に指しかからうとした時、その向こうからぬつと頭を見せた者がいた。鉢合わせた者を蹴散らさんばかりに、ただ橋の真ん中を歩いている。老人がぎよつとして道を譲つた。

背の高い、がっしりとした体格の男だつた。不敵な笑みを浮かべてこちらへやつてくる。ウルエロは思わず足を止めたが、主人が構わず進むので慌てて駆け寄つた。橋の真ん中で両者が出会い、が、お互に目もくれようとしてない。

男は無言で持つていた鞄を差し出した。同様に口を閉ざして受け取つた主人から、そのまま鞄を手渡されるウルエロ。ずつしりと重い。

「お疲れ様、と言いたいところだが」

すれ違ひざま、ソルキウスが言つた。

「やり方があまいぞマルベルグ。よりもよつてお前の爪をかまし

たな」

「あれで済ませてやつたのだ。人が女のところに出かけようとした矢先にアポなしで飛び込んできたので、面倒になつてな。手早く本人の命を代償にしたまでだ。まあ、おかげで俺自ら金を届ける羽になつたが」

烈斬の悪魔はさらりと言つた。横目で冷めた視線を送るソルキウス。

「一つ忠告しよう。旧時代の考え方は捨てた方がいい。我々はより実益のあるやり方を目指すべきだ。あんな男の命をもらつたところで、何のうまいもない」

「ならばこちらも一つ聞きたい。実益を得るなら得るで、何故こんな遠回りなやり方を選んだ？ お前の力なら履行を強制することも、金のかたに店を奪うこともできたはずだ。わざわざ俺から金を借りさせてまで、本人の意思で金を返すよう仕向けたのは何故だ？」

「そういう時代だということだ。私は枢密院の決定を遵守しているにすぎない。『千年計画』はもう始まっているのだ。お前だけ従わないわけにはいかないぞ」

「なるほど。俺の出方を見る意味もあつたわけか。見くびられたものだ。宰相閣下のお考えは俺にはよくわからんな。あのまま行けば、そう遠くないうちにこの世が手に入つていたものを。馬鹿なことをしたものだ」

立ち去ろうとしていたソルキウスの足は、そこで止まつた。お互に背を向けた二人の間に、稻妻にも似た何かが走つたと、ウルエロには感じられた。周囲の人々もそれに気づいたのか、三人のそばを足早に駆け抜けていく。橋の上に悪魔だけが残された時、ソルキウスは口を開いた。

「父と王と、どちらの考えが正しいかを議論するつもりはない。最終的には理ではなく情で決めるしかないのだから。ただ、指導者が変わつたからにはそれに従うべきだ」

「そして従つた結果が今の立場か？　若様」

マルベルグは振り返つた。変わらず笑みのままである。しかしそれは、敵を前にした獣を思わせる、ひどく攻撃的なものだった。ソルキウスは背を向けたまま言つた。「そうだ」。

「人類は自らの欲望により、悪魔にすべてを差し出すのだ」

歩き出した主人に遅れまいと駆け出すウルエロ。数歩進んで立ち止まり、くるりと反転して頭を垂れた。主人の悪友が後ろ手に去つていくのを認め、再び主人の背を追う。ウルエロは聞き逃さなかつた。背後の男が低い声で呟くのを。

「期待してゐるぜ、常闇の悪魔」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4404s/>

人魔誤謬録

2011年5月8日01時25分発行